石川モンゴル親善協会だより

～ Байгаль Эх バイガル　エヘ　母なる自然 ～

第8（特集）号

石川モンゴル親善協会事務局
事務局長：藤木　正範
〒920-0862　金沢市芳斉２－11－18
TEL　：090-9449-4323
E-mail ：fujiki4323@gmail.com

【モンゴル国スタディツアー２０１４】

９２番学校にて日本語図書を寄贈する奥田団長（左）とオクトヤブリ学校長（右）、モンゴル国首相（青ネクタイの男性）

２０１４夏訪問団　団長　奥田建　初めてのモンゴル国訪問

底抜けに青い空の色を「モンゴリアンブルー」というのだと運転手さんが教えてくれました。そんな好天に恵まれた一週間の旅でした。

誰もが感嘆してきたモンゴルの広大な自然の中に身を置くことができたのは感激の一言です。そして出会った人たちの誠実さは忘れることができません。元留学生の方々、遊牧の家族の人たち、村長さん、校長先生、元総理補佐官、元アカデミーの長官、青年実業家など、そして全行程を共にしていただいた通訳さんと運転手さん。食事や語らいの時間は限られていますが、今では懐かしい想いで一杯です。これも石川モンゴル親善協会の方々が培ってきた交流の積み重ねの賜物に他なりません。

草原のゲルに泊り、遊牧の人たちの生活にわずかでも触れることができ、遊牧の民の逞しさや家族の絆を感じてきました。そして、朝日と夕日と星空を大草原の中で存分に眺めてきました。第 92 番学校ではモンゴル国の総理や市長も出席する始業式の式典にゲストとして招いていただき、紹介と祝辞を述べることもできました。

広大な国土と豊かな鉱物資源で伸び盛りのモンゴルですが、会話の中にはモンゴルの課題が多く見受けられます。道路技術や上下水道など都市開発に伴うインフラ整備。鉱山開発と環境保護。教育のあり方や留学の定着化。訪れたサイハンオボーでは南部特産のサジーなど農産物の製品化と流通。ツーリズムの振興。植林技術の指導要請等々。ゲルを含む住環境の近代化やフェルトの製品化なども話題になりました。

３００万人弱の人口に豊かな資源、集中化する都市と５０００万頭の家畜を持つ伝統的遊牧のなかに格差をはじめとした社会の矛盾が大きくならないよう願わずにいられません。日本への期待と友情を強く感じるとともに、人生や幸せの価値観を考えさせられる訪問でした。

活動報告　　刈本良子

モンゴルスタディーツアーの報告

今回の旅に参加させていただき、楽しい８日間を過ごし、仲間の５人のメンバーと、モンゴルの私たちにお世話くださった皆様方に、はじめに感謝申し上げます。モンゴル訪問は二回目の私は長距離移動も、ゲルでの生活も、そして風呂なし肉食の異文化を体験することはとても愉快なものでした。日本での日常の水のありがたさや、バラエティにとんだ食事等に感謝し、家の中ものを片付けスリムにしょう、断捨離をしょうと心に誓って帰ってきました。

ツアーは日程もゆるやかで、個性豊かな５人のメンバーと、とてもゆったりとしたスケジュールの中で大いに学び楽しんできました。このツアーでの私の役目は、ウランバートル市内の９２学校で日本語を勉強している生徒たちとの交流をするためのプログラム作成と指導することでした。

ツアー６日目の９月１日は新学期、いよいよ生徒たちと交流をする日です。３ヶ月の夏休みがおわり、生徒たちは正装をし、学校正面に集まり、保護者の方々の前で歌を披露していました。私たちも紹介され図書の贈呈をし、奥田さんがごあいさつされました。びっくりしたのは総理大臣が来校され入学式のセレモニーにあいさつをされテレビに放映されたことでした。教育に力をいれているのだなと感じました。

学校は白と黄色にぬられ校内の床は大理石で立派な学校でした。日本語教室では２０人くらいの生徒たちが笑顔で迎えてくれました。まず、自己紹介、絵本の読み聞かせ、そしてみんなでゲーム「チクタク時計」、歌「友だちは大事やで」、「幸せなら手をたたこう」、指ダンス、、フォ数字、タングラムとたくさんの笑いの中、なごやかな時間があっという間にすぎました。生徒たちには楽しい遊びの中で、笑いの中で、自然に日本語をおぼえていってくれるといいなと思いました。

一回目のモンゴルに行った時、水をやり世話をしたサジーの木々と再会、実がたわわになっていて感激。ゲルのご主人チンバットさんがこの木もあの木も見てくれと案内してくれ、紙コップにサジーを摘みいっぱい入れてくださいました。　ただただうれしかった。この先サジーの収入で生活が潤えばいいなと願わずにはおれません。

またこの時私についてくれた通訳のトンガさんが会いにきてくれ、とてもうれしかった。これからも友好を保っていきたいと思っています。

最後にモンゴル国が豊かになりますように祈ります。

活動報告　宮田ちずこ

「私を砂漠へ連れていかないで」

三度目のモンゴル、今回はいろいろとあって超逃げ腰。だけどモンゴルの友達が待っている。たっぷりお土産も準備してしまったし、いさぎよく飛び立つことに（泣）。

今回は特別な目的があった。わたしの思いつきでツラツラと書き出してみた小さなプランが少しずつ膨らんで、このツアーのテーマーになったのだ。

去年初めて行ったモンゴルで、その土地と共に暮らして、土地からの恵みだけで生きる遊牧という生き方を遠くから見た。そして日本ではもう亡くなってしまった自然と人間の関係がまだちゃんと残っているモンゴルの人間の暮らしが、このままこの自然と一緒に残って欲しいと思って、思いつくままに書いてみた**「羊毛を使った女性の手仕事をつくる」**というプラン。

三度目の今回は、サイハンオボーというゴビ砂漠の小さな村を訪ねて、遊牧民のバイラさんの家に泊めていただいた。観光地のゲルキャンプではない本物の遊牧民のゲル（丸い家）。ゲルの構造をとてもうまく利用している。

壁と屋根にはフエルト（羊毛を重ねて圧縮したもの）を巻き付ける。ゲルを固定するロープや日常生活上使うひもも羊やラクダの毛や馬の尻尾の毛をていねいに編んだものを使っている。

遊牧はその名から想像するようなのんびりしたものではない。静かに見えるゲルの中では毎日搾る乳を加工する仕事に追われている。季節をいつも感じとり、場所を移動しながら家畜と共に生きている。移動が基本の限りなく簡素な暮らしだが、ゲルの外ではソーラー発電、内では TV やモバイル機器、女性たちの厳しい戸外の仕事から肌を守るための現代的な化粧品が並んでいる。時代はやはり変わってきているのだ。

遊牧民と言っても北と南では暮らし方も、飼っている家畜の種類も全然ちがう。でも共通していることは、遊牧は多忙ということ。では誰がフェルトなど羊毛の加工をしているの？遊牧民がその営みを止めるときは、多くの場合が寒波で家畜がたくさん死んだときだ。家畜は財産なのだ。やむを得なく遊牧生活をやめて都市へ出稼ぎに出る男性と、田舎に残って子供達とともに暮らしを守る女性たち。その女性たちがゲルのなかで細々とフェルトの小物（主にスリッパと防寒用の中敷き）を作っている。

これはやはり、遊牧民のゲルに滞在させてもらって初めて実感としてわかったことだ。サイハンオボー村の村長のアマルさんに紹介してもらった女性のインクマさんもそういう家庭の女性のひとりである。村役場の近くにある自宅ゲルに子供達と暮らして、村の女性たち五人で協力しながらフェルト製品を作っている。ご主人は、ウランバートルに出稼ぎに行っている。工房の中にある古いミシンは手回しで４０年余り経ったもの。フェルトを作る手回し機械はドラムカーダーと言うのだが、これも毛をひっかける金属の針の櫛のような部分が傷み易い。取り換えるのは難しいと言う。ゲルの中に並べた素朴な靴や部屋履きを買い求めながら話しを聞いた。

私は何がしたいのか？支援って支えて援助するってことだよね。

この言葉、何度聞いても私はしっくりこない。好きじゃないから使いたくない言葉のベスト５に入っている。だ

って昨日まで知らなかったところへ、いやいやながらも自らやってきて、いきなり支えますなんて、反対の立場だったら「私の何を知っているの？」と腹立たしく思うに決まっているから。私は興味があるの、この遊牧と言う暮らし方に。私たちがこんなに物をもったり、取り合ったりしているのに、はるか遠いこの国ではこんな風にまだ土地を所有しないで、家で地面を塞がずに、馬を走らせて川の水を汲み暮らしている。
私はこの人たちに羨望し続けている。日本でがんじがらめになった全てを、地平線の向こうに解き放ってしまいたい。支援なんて仰々しい。あえて、たとえて言えば、子供のころ隣の席の友達にケシゴムを貸したり借りたりしたようなそんな関係に成れたらいいと思う。そして草原はいつまでも気持ちよく地平線まで続いて欲しいと願っている。

活動報告　藤木正範

チンバットとオユンさん夫妻の畑

この春の４月に訪れてポット植えしたスイカが芽をだして、急ごしらえの畑でピンポン玉の大きさの実がついている。可愛いらしいちいさな葉、肥料が少ないな。お二人は強いチヤレンジ精神の持ち主。４００キロは離れているウランバートルまで有機農法の講座を聞きに行く。中国製のビニールハウスの中ではロシア産の種のものがドッジボール大の実をつけている。まだ孫ツルは緑色。あと１０日もすれば、スイカはもうひとまわりは大きく育つだろう。

サジーはオンギ川市民運動の川の再生の事業の一翼をになって畑がつくられた。１００メートル四方に６００本のグミ科の棘をもった背丈ぐらいの木が植えられているサジーは沙棘でモンゴル呼びはチェチェルガン今は黄色い実が小枝にびっしり連なってついている。村の女性たちが木の下に布をひろげて収穫している。勧められるままにいくつもをいっぺんに口にほおばる。甘酸っぱい。厳寒の冬の間じゅう外で凍らせて保存し、ゲルのかまどで溶かして食べる。

２００７年に刈本さんとボーイスカウトの大学生隊でここを訪れ灌水作業を手伝った。川のそばなので井戸は浅い、長い酌でくみあげて、天秤棒でかついて散水した。腰までぐらいだったがいまは手をのばした背丈になってたくさんの実をつけている。

昼食の時間になりボーズ（肉まんじゅう）とアロールをご馳走になった。おいしい肉汁がほおばると口中にひろがる。御代を申しいれたがいらないと言われ好意に甘えた。

再会した人達のこと

この３月まで金沢に留学していたザーナさんは研究機関で講師の職についていた。フェルトのことなど私達の要望には親身になって手をつくしてくれた。

ドルジさんは毛織物関連のプロジェクト、ドルジ夫人のシゲさんは旅行会社、ツェツェグさんは翻訳と旅行会社、ガンテイグマさんは石炭液化プロジェクトに、ガントゥルガさんは環境保全運動の事務局、ボルさんは大学付属の小中学校の校長、皆さんいろんな分野で活躍中、忙しいなか空港までの送り迎え、懇親会での久しぶりでの歓談いつまでも変わらぬ国境を越えた友情に心が温まる。

活動報告　山田絵美子

おひさままわり　モンゴル見聞一週間

「ゴビの砂漠の広い平原に立つと人生観が変わります」と聞いたことがあります。また三年前には九州国立博物館で「草原の王朝・契丹」を見る機会がありました。～行ってみたいなぁ～。願っていたら叶う？お誘いを受けて、モンゴルスタデイツアーに参加しました。その一週間は濃い濃い時間でした。

一日目、まずスフバータル広場にいくと、その日は〈大安吉日〉なのか何組もの結婚式があり式を済ませたカップルの周りには、モンゴル装束の親族の人たちがいて、殊に男の人の民族衣装は龍の刺繍が施されていたりして豪快でした。

名刹ガンダン寺へ参拝＝見物に行った時の事。寺院を入ったところに大きな銅の円筒があり、更に中へ進むと小さい円筒がずらっと並んでいました。壁ぎわには、小さな仏像が数え切れないほど並んでいてお堂の中心には見あげる大きさの黄金色の観音様（２６．５㍍）がおわします。その前には〈三つ目〉の仁王像が一体。〈三つ目〉には何か意味があるのでしょう。

円筒は〈マニ車〉と呼ばれるものだと後で知りました。

マニ車は一回まわすと真言の経文を唱えたのと同じ効果があるとのことでした。そのマニ車の回し方は〈おひさままわり〉。私たちが　時計回りとか右回りという時、モンゴルの人は〈おひさままわり〉というのですね。なんと悠久で雄大なスケールでしょう。

〈おひさままわり〉に始まり、見るもの、聞くもの、食べるもの、初めてづくしで寸暇なく刺激的でした。あんまり、えーっとか、あーっとか驚いてばかりいたら、運転手のウッチーさんと通訳のバヤルマが笑ってしまって、バヤルマが「モンゴルではあんまり笑ったら肝臓が取られる、というのですよ」と。

広大な平原に立ち、夜は手が届きそうな大きな北斗七星や星々を見、ゲルの生活を体験し〈おひさままわり〉は、生活に即していると、思うばかりでした。

羊毛のフェルト加工の工房も見学しました。軽くて暖かいフェルトのスリッパを求めました。一つ一つが手づくりで、ステッチされた文様の素朴な味わいは却って斬新です。

九月一日はモンゴルでは小学校の入学式です。９２番学校の入学式に参列しました。

団長の奥田さんは着物姿で臨み、日蒙親善のご挨拶と日本から持参の図書贈呈が執り行われました。そのあと、日本語を勉強している３年生のクラスで交流の時間があり、刈本さんが歌やゲームをリードして楽しい時間でした。私もその中で〈絵本を読む〉機会が備えられました。外国で日本の絵本を読む体験は初めてです。通訳のツェツェグさんが温かく見守って訳して下さり無事に読み終えることが出来ました。

ウランバートルから少し走ると、もうすぐ平原。舗装された道路が切れると轍の後を、轍も無くなり道なき道と思える平原を３００キロ、５００キロと走行しその間殆ど他の車に出会ったりしない。出会うのは遠くに群れなす牛、馬、ヤギ、ヒツジ。ポツン、ポツンと見かけるゲル。その空間や生活も悠久で雄大。息を飲むばかりで

した。馴れない馬乳酒に少し体調を崩しましたがこれも貴重なモンゴル体験でした。

新月に旅立ち、三日月を楽しみ、帰るときは上弦の月と一緒に空港に向かいました。満月の平原はどんなだろうかと思いを馳せています。

夫々、目的や役割を担っての個性豊かな六人の旅はそのままに得難い豊かさを共有できた旅でした。ありがとうございました。

活動報告　森任司

ゲル家長の勇姿　　（ゴビ砂漠）

私と“石川モンゴル親善協会”との関りは、本年３月２９日（土）に「私が知るモンゴルウルスと内モンゴル（中谷アンギルマ）」を聴講したのがきっかけでした。早速私は入会し、７月上旬・８月下旬にモンゴル国を訪問しました。７月はツアー会社のパック旅行で、ナーダム（開会式・相撲・弓・馬）を観たり、テレルジに行き草原と乗馬を楽しみ、単なる一観光客でした。８月は“石川モンゴル親善協会”の‘モンゴル国スタディツアー’への参加でした。

今回、一番印象に残った点はゴビ砂漠での一般家庭のゲル宿泊です。草がまばらな草原での山羊・羊・馬・ラクダ・牛の放牧生活は、通りすがりの私でも厳しさを感じました。ゲルで一泊した翌朝、何げにゲルを出ると一家は協力して“山羊の子供を群れから分離する”　作業を実施していました。昨晩の柔和なおもてなしをしていた主人は 戦う家長として家族をリードし、家族みんなが協力し合う姿は　私に戦慄と感動を与えました。

現在　ソーラーパネルを使い電灯・テレビ・冷蔵庫、バイクやトラックを使う生活が始まっていますが、昔から繋がる遊牧の技術・生活様式がしっかり紡がれていることにも感銘しました。

今後私が文化・経済面でどんなサポートができるのか、模索中ですが、“家族の一体化を妨げなく苦労されている事柄について支援できれば良い”と考えています。

パノラマ写真①　平原を歩く

パノラマ写真②　草原の夕陽

≪　行程表　≫

８月２７日（水）　小松空港発→（仁川経由）→ウランバートル・チンギスハーン空港到着
ウランバートルで宿泊

８月２８日（木）　市内散策・ガンダン寺見学
ウブルハンガイ県アルバンヘールへ出発→ラクダに乗る
アルバンヘールで宿泊

８月２９日（金）　オユンゲルさんの遊牧地・サジー畑とゲルへ
ゲルで昼食
サイハンオボーへ出発→アマル村長と合流
ゲルで宿泊（乳しぼり、山羊追い、ボーズ作り体験）

８月３０日（土）　乗馬体験
ゲルキャンプでアマル村長と意見・情報交換
川浴、寺院跡散策
ゲルキャンプで宿泊

８月３１日（日）　インフマさん（女性）の自宅ゲル訪問
（フェルト製作の様子を見学、情報収集）
サイハンオボーを離れマンダラゴビ経由でウランバートルへ
９２番学校のオクトヤブリ校長先生宅にて歓迎会
校長先生宅で宿泊

９月１日（月）　９２番学校の始業式に出席
（奥田団長より挨拶と図書の贈呈）
日本語クラスの生徒と交流会
（刈本によるゲーム、山田による絵本朗読等）
校長先生と今後の交流について相談
ウランバートル市内散策・買い物
フェルト製作組合「ゴールデルチャンス」の見学
元留学生たちとの会食
（ザーナ、ガントゥルガ、ドルジ親子、バヤルマー通訳）

９月２日（火）　モンゴル歴史博物館見学、メルクール市場で買い物
科学アカデミー、チャドラ氏を訪ねる（奥田、森、藤木、宮田）
観劇（刈本、山田）
ウランバートル・チンギスハーン空港を深夜に出発

９月３日（火）　（仁川経由）→翌朝小松空港に到着

●参加者

石川モンゴル親善協会員★６名

ガントゥルガ　★山田　　★奥田　★藤木

★宮田　★森　　★刈本

写真：ウランバートル スフバートル広場にて

（通訳者：バヤルマ、ツェツェグ）